

1. 10代婦人の妊娠

分担研究者 自治医科大学医学部 玉田 太朗
研究協力者 石浜 淳美・片桐 清一
北村 邦夫

研究目的

(1) 10代分娩の児の予後追求

昨年度10代妊娠850例の調査結果を報告したが、それによると約30%のものが分娩にまで至っている。ところがわが国では、諸外国にくらべ、若年未婚産婦から生まれた児を養育する環境がほとんど整っていない。またこれらの児の養育状況の実態がほとんどわかっていない。

今後、若年妊娠の増加が予測されるので、これらの実態を把握しておくことが必要である。

(2) 10代分娩の産科異常

10代妊産婦において、周産期異常が高いのは、婚姻状態や妊娠中の保健管理のような社会的因子によるのか、身体的な未熟さによるのかが不明である。これを明らかにして、今後の保健指導、周産期管理の指針を得ることを志した。

(3) 10代妊娠の実態調査と分析

昨年度集計された10代分娩症例のうち829例について、調査項目間の相関を検討し、性教育のあり方、学校・家庭における生活管理、妊婦指導などにおける指針を得んとした。これについての詳細は、研究協力者(石浜)の報告にゆずる。

本報告では1)および2)の成績についてのべる。

研究方法

(1) 10代分娩の児の予後追求

これについては、乳児院、児童相談所、家庭相談所などでの調査も試みたが、情報が断片的であり、かつ人権の問題等が生ずるおそれもあるので断念し、本年度は以下の2つの方法をとった。

(ア) 3才児検診からの調査：3才児検診時から逆算して、分娩時に10代であった母親の児について、3才児検診率ならびに養育環境を調査した。これは主として北村邦夫により、群馬県3保健所で行われた。

(イ) 10代未婚産婦の児の予後を、分娩施設からの情報にもとづき、個別にフォローした。これは青森県において、主として片桐清一により行われた。

(2) 10代分娩の産科異常

18才以下の分娩例を全国的に依頼、調査した。昭和57年2月現在、その年令区分別症例数は、18才：47例、17才：21例、16才以下：11例、計79例である。また婚姻状態についてみると、既婚者30例、妊娠中結婚14例、分娩まで未婚25例、不明10例であった。

これらについて、分娩所要時間、出血量、児体重を分析した。

成績

(1) 10代分娩の児の予後追求

(ア) 3才児検診時の調査：群馬県藤岡、渋川、館林3保健所における10代分娩数は表1に示したように41例あり、これは全分娩数の0.7%にあたる。また全体の3才児検診受診率は93.4%の高率であった。これに対し、10代の母親の児の3才児検診受診率は、表2に示したように対象者41名中22名、53.7%と有意に低かった。

10代分娩の児の離乳までの栄養方法をみると、全国調査にくらべ、母乳栄養率が有意に高く、人工栄養率が有意に低かった。(表3)

10代分娩の児の主たる養育者(これは日中ケアーをしているもの)をみると(表4)、母が84.6%と高率で、3才健診低受診率からうかがわれた予想とは逆の傾向であった。これは3才健診受診者が選ばれた集団であることを示唆するものと考えられる。

10代分娩の児の身体、精神、運動発育は、乳幼児発育調査(昭和55年)にくらべ、有意差はなかった。(表略)

また予防接種状況についても対象と有意差はないものと思われた。

う歯については、10代分娩の児で、1人当りのう歯数が有意に多く、処置数が有意に少なかった。

(イ) 個別にフォローした10代分娩の児の予後：これは17例あり、年令は14才：2例、16才：4例、17才：3例、18才：5例、19才：3例となっている。結婚および入籍状態と、児の養育状態との関連

をみると、分娩と同時か、まもなく入籍した5例は、すべて自分で（夫と一緒に）養育しているのに対し、結婚できなかった12例では、養子に出したものの6例、施設へ預けたものの2例、母親、あるいは母親と本人とが一緒でというものの2例、本人一人でというものの1例、他の1例は不明である。自分1人でというものは16才の会社員で、54才の会社の上司（妻子あり）との交際で妊娠したものである。本例に限らず、10代分娩の母親は、学業や職業を途中で断念し、みじめな生活に追いやられていることがうかがわれる。

(2) 10代分娩の産科異常

分娩時間、出血量および児体重の、年齢別および婚姻状態別成績を図1、図2、図3に示した。分娩時間については、低年齢になるほど低下する傾向があり、婚姻状態では未婚者において少量であるのも、若年者が多いためであろう。これに反し、出血量は、未婚者で多くなる傾向があった。児体重は、年齢別、婚姻状態別にみて、平均値はいずれの群でも差を見なかった。

要 約

(1) 10代分娩の児の予後追求

群馬県における3才児健診時の調査では、10代産婦が、むしろ母乳で育てる率が高く、日中の養育を

しており、児の発育、健康状態も、う歯を除き良好であるという、明るい結果が得られている。これに対し青森県の個別フォローでは、結婚できたものは17例中5例にすぎず、これらは、本人と夫が児を養育しているが、他のものは、施設や養子に出すものが圧倒的に多い。このように母児が離別しない場合でも、養育の負担が、学業や職業の継続に負担となり、若い母親のその後の生活設計がみじめなものとなっていることが、うかがわれた。

これらは地域的な差もあり、3才健診受診者は恵まれた群であることも考えられるので、現状の一端を示すものにすぎないと思われる。次年度は更に調査を広げる予定であるが、公的機関による調査をまたなければ解明できない点も少くない。

(2) 10代分娩の産科異

今回、相当の努力をして例数を集めたつもりであったが、17才以下の分娩数は満足すべきものでなかった。分娩所要時間が、若年者、未婚者でむしろ短かくなる、反面出血量は未婚者でやゝ増加するといった傾向があるが、全体としては、若年者でも分娩経過は正常なものが多いという印象である。

表 1 地 域 の 概 要

	人口(昭和55年10月1日)	55/50人口増減	出生数(昭和52年)	10代分娩数(%)	3才児健診(昭和55年度対象者)	3才児健診受診者(%)
藤岡保健所管内	106,047	+ 3.8 %	1,583	14 (0.9)	1,592	1,449 (91.0)
渋川保健所管内	110,369	+ 3.9	1,620	11 (0.7)	1,540	1,506 (97.8)
館林保健所管内	159,915	+ 8.4	2,498	16 (0.6)	2,592	2,389 (92.2)
計			5,701	41 (0.7)	5,724	5,344 (93.4)

表 2 10代分娩の児の追跡結果

	10代分娩数 (昭和52年)	3才児健診受診者 (昭和55年)	%
藤岡保健所管内	14	8	57.1
渋川保健所管内	11	8	72.7
館林保健所管内	16	6	37.5
計	41	22	53.7

表 3 10代分娩の児～離乳までの栄養方法

	N = 26	乳幼児身体発育調査 (昭和55年) ☆	
母 乳	53.8 %	34.6 %	*
混 合	34.6	24.9	
人 工	11.5	40.5	**

☆ 3～4月の児の栄養方法 (調査数20,575)

* P<0.05

** P<0.01

表 4 10代分娩の児～主たる養育者

	N = 26	%
母	22	84.6
祖 母	2	7.7
叔 母	1	3.8
保 育 園	1	3.8

図-1 分べん時間

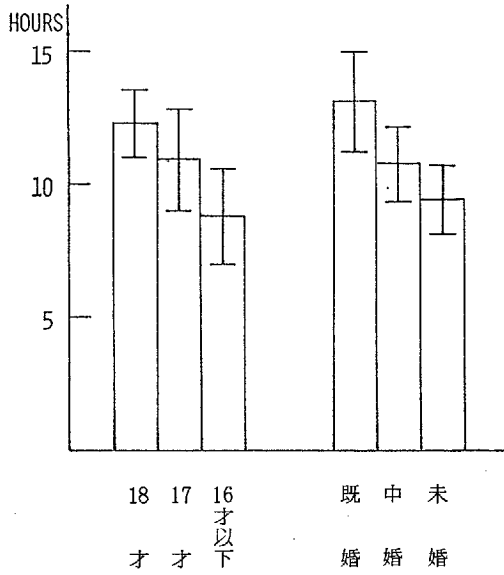


図-2 出血量

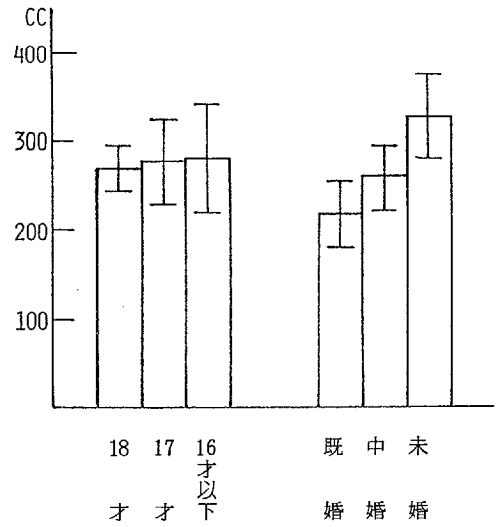
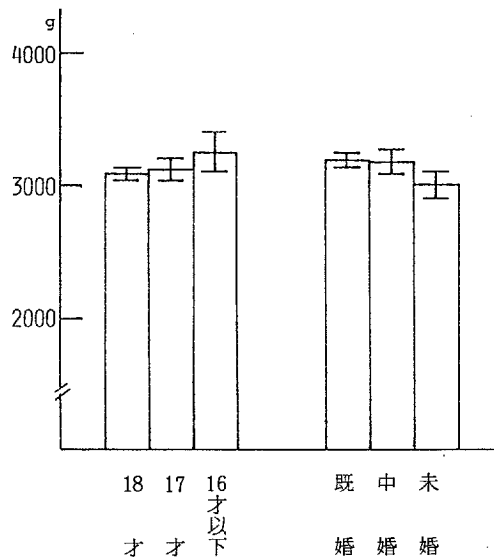
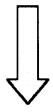


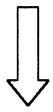
図-3 児体重





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約

(1)10代分娩の児の予後追求

群馬県における3才児健診時の調査では、10代産婦が、むしろ母乳で育てる率が高く、日中の養育をしており、児の発育、健康状態も、う歯を除き良好であるという、明るい結果が得られている。これに対し青森県の個別フォローでは、結婚できたものは17例中5例にすぎず、これらは、本人と夫が児を養育しているが、他のものは、施設や養子に出すものが圧倒的に多い。このように母児が離別しない場合でも、養育の負担が、学業や職業の継続に負担となり、若い母親のその後の生活設計がみじめなものとなっていることが、うかがわれた。

これらは地域的な差もあり、3才健診受診者は恵まれた群であることも考えられるので、現状の一端を示すものにすぎないと思われる。次年度は更に調査を広げる予定であるが、公的機関による調査をまたなければ解明できない点も少くない。

(2)10代分娩の産科異

今回、相当の努力をして例数を集めたつもりであったが、17才以下の分娩数は満足すべきものでなかった。分娩所要時間が、若年者、未婚者でむしろ短くなる、反面出血量は未婚者でやゝ増加するといった傾向があるが、全体としては、若年者でも分娩経過は正常なものが多いという印象である。